

令和7年度 堀江中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)	
			国語	数学	国語	数学
3 年	学校	255	53	47	5.5	7.4
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6

	平均IRTスコア
	理科
学校	503
大阪市	489
全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

2 中学生チャレンジテスト

学年		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会	数学	理科※	英語	国語	社会	数学	理科※	英語
3 年	学校	244	66.0	53.7	56.1	47.1	58.2	4.8	3.9	7.7	5.7	4.0
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4

※ 3年生の理科はB問題を選択

令和7年度 堀江中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

令和7年度「中学生チャレンジテスト(3年生)」結果

【成果と課題】

大阪府を100とした標準化得点は、国語科102.8、社会科104.9、数学科104.1、理科102.4、英語科109.4で、すべての教科で大阪府平均を上回った。加えて、平均無解答率についても、すべての教科で大阪府平均を大きく下回っており、全国学力・学習状況調査と同様、問い合わせに対してあきらめることなく取り組んでいる姿勢がうかがえる。

国語については、観点別の平均正答率において、知識及び技能の「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域のみ0.3ポイント大阪府平均を下回ったが、その他の領域においては、大阪府平均を上回る結果となった。また、問題形式別の平均正答率においては、「選択式」(+0.9)、「短答式」(+0.5)、「記述式」(+0.2)でわずかではあるが、すべて大阪府平均を上回る結果となった。

社会については、観点別及び問題形式別の平均正答率すべての領域で大阪府平均を上回った。「選択式」は大阪府平均に対して2.2ポイント上回っているのに対して、「短答式」、「記述式」はわずか0.1ポイントのプラスということで、問題形式で正答率に差のある結果となった。

数学については、領域別の平均正答率において、「数と式」、「関数」、「図形」の領域で大阪府平均を上回ったが、「データの活用」の領域において府平均を下回った(-0.3)。観点別の平均正答率においては、「知識・技能」(+1.2)、「思考・判断・表現」(+1.1)ともに大阪府平均正答率を上回った。また、問題形式別の平均正答率においても、「選択式」(+1.6)、「短答式」(+0.6)、「記述式」(+0.1)で大阪府平均を上回ることができた。

理科については、領域別の平均正答率において、「エネルギー」、「粒子」、「生命」の領域で大阪府平均を上回ったが、「地球」の領域において府平均を平均を下回った(-0.2)。観点別の平均正答率においては、「知識・技能」(+0.9)、「思考・判断・表現」(+0.2)ともに大阪府平均正答率を上回った。問題形式別の平均正答率においても、「選択式」(+1.0)、「短答式」(+0.1)、「記述式」(+0.1)で大阪府平均を上回ることができた。

英語については、観点別及び問題形式別の平均正答率において、すべての領域で大阪府平均を上回った。特に、領域別の「書くこと」(+2.8)、観点別の「知識・技能」(+3.1)、問題形式別の「記述式」(+2.6)で大きく大阪府平均を上回る結果となった。

【今後に向けて】

領域別、観点別、問題形式別で若干の差はあるものの、すべての教科において大阪府平均正答率を上回ることができた。特に今年度は、英語科で高い結果となっている。今後も規律ある授業やICTを活用した授業を着実に実践する必要がある。

しかし、どの教科においても度数分布は複雑であり、高い正答率となる生徒が一定の割合でいるものの、学習習慣がなかなか身についていない生徒も一定数いると推測できる。全体としての基礎学力向上と正答率の低い生徒層のボトムアップが課題である。